西南学院大学　国際文化論集　第22巻　第２号　1－32頁　2008年３月

中国における箸の出現と普及

髙　倉　洋　彰

Ⅰ　二本箸と折箸の出現

二本箸の出現　箸の源流が中国にあることは論をまたない。

火箸のような食以外の用途をもつこともあるから，食の補助具と限定せず，２本一組で使われる箸状の道具をそれとするならば，現在最古とみなされている出土例は，河南省安陽市の侯家荘1005号墓に副葬されていた青銅製の箸であることを，箸の源流について精力的に研究を進めた太田昌子（2001）や中国において箸文化史の研究をリードしている劉雲（1996）らが指摘している(1)。

侯家荘1005号墓は1935～36年に発掘調査されている。その内容ははっきりしていないが，幸い1937年に梁思永によって作成された「殷墟発掘展覧」の目録がある（梁　1959)。それによれば，箸は「四．飲食」の項にあり，６本が展示されている。箸の解説を読むと，青銅製の中柱旋龍盂２・単耳盂１・壺３・鏟３・箸６・漏勺１・円形器１，それに中柱盂形陶器や骨錐などが組み合わさって出土している。箸とヘラ状の鏟には長い柄が付けられていたようだが，大きさについては報告されていない。箸６本を２本一組と考えれば，盂３・壺３・鏟３・箸３となり，それぞれ各１の三組になる。そこから梁は「三組のはなはだ複雑な食具のようである」として，飲食具に分類している。しかしどのようにして飲食に用いたと考えたかわからない。殷は紀元前1300年頃から前1027年頃まで置かれた商王朝の最後の都だから，この箸もその間の時期のものになる。

商代の箸は，湖北省宜昌市長陽土家族自治県の香炉石遺跡からも出土してい

る（王・張　1995)。香炉石遺跡はダム建設にともなって1988～89年に遺物包含層が発掘調査され，商代中晩期に相当する第５層と春秋時代（東周，紀元前771年～前403年）に相当する第３層から，大量の土器や石器・骨器などともに，骨製・象牙製の箸状製品が検出されている。

商代に属する第５層出土の箸は骨製だが，何の骨であるかはわかっていない。中心の点を円で囲む円文で飾られた，断面方形の首部[2]が11.2cm 残存している[3](図１－１)。単体の，かつまた残片の出土であって，これだけで箸とするには疑問があるが，同じ形状で同様の円文で首部を飾る例が第３層から出土していて，箸と判断することを可能にしている。

第３層出土の箸は象牙製で，断面方形の首部は同心円化した円文で飾られ，足部に向かってやや細くなるとともに断面が円形になる（図１－２)。足部の先端を欠いていて，長さ17.4cm 分が残っている。本例は象牙箸の最古の例になる。商代と春秋時代の箸が類似した形態と文様をもつことから一方の混入が疑われかねないが，分厚い間層を挟んでいて混入は無いだろう。

象牙箸については，戦国時代の韓非（～紀元前233年）らの著作集である『韓非子』説林上篇に「昔者紂為象箸而箕子怖。以為象箸必不加于土鉶，必将犀玉之杯（後略)」，つまり商（殷）王朝最後の王である紂が象牙で箸を作らせたところ，後に箕子朝鮮を開いたといわれる箕子が，象牙の箸で食事をするような贅をこらすなら，羹（熱い汁物）も土器ではなくきっと犀角や玉で作られた杯に盛るようになるだろう，そうなれば何事にも贅を尽くすようになるだろうから，天下の財を尽くしても足りないような専横を行うようになるだろうと恐れたという話がある。象牙箸を作ったことをもって紂王の専横非道化の予見を示すこの話は『韓非子』よりも古い『楚辞』や後の『史記』にもあり，広く流布していたとみられる。紂王が本当に象牙箸を作ったかどうかはわからないが，明らかに食事に用いる道具として語られていることに注目したい。しかも，『韓非子』をさかのぼる春秋時代の香炉石遺跡から象牙箸が出土していること，湖北省の長陽土家族自治県にある香炉石遺跡は都あるいは文化の中心地とは程遠い環境であることを考えれば，春秋時代には象牙箸が相当に普及していたこと

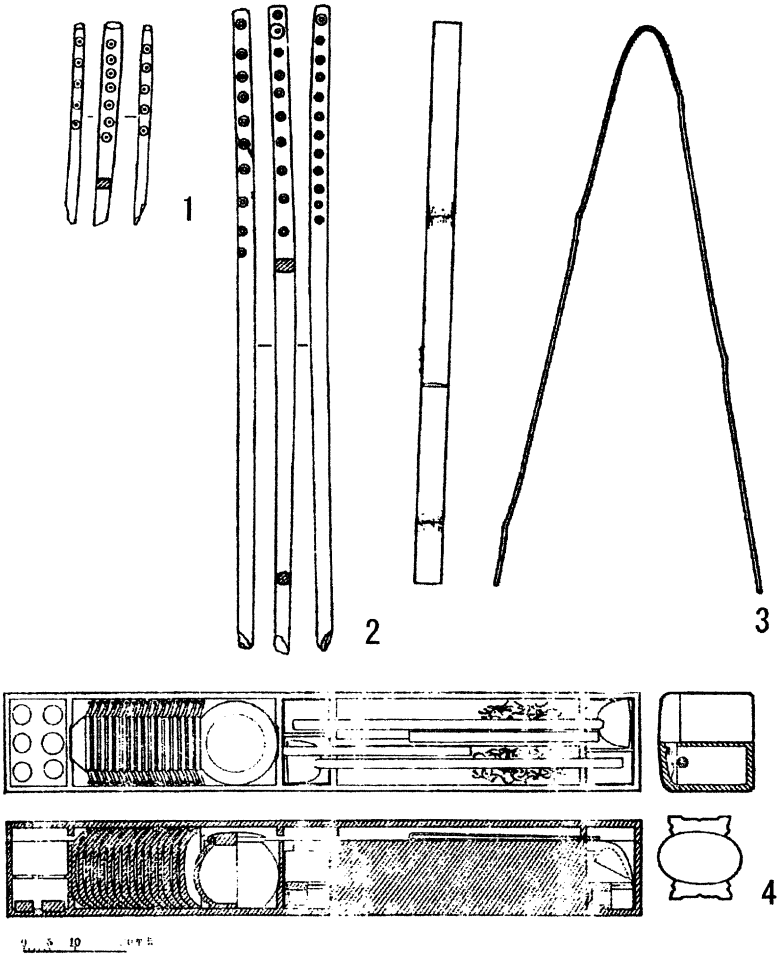


図1　商代・春秋時代の箸と酒具箱
1・2：安徽香炉石遺跡，3・4：湖北曾侯乙墓（1・2：S＝1/2，3：S＝1/5）

を示唆している。

春秋時代の二本箸はほかに安徽省貴池県徽家冲，山西省曲沃県曲村の両遺跡で出土している[4]。

1977年に長雨に洗われて春秋時代の青銅器が偶然出土したことを契機に安徽省徽家冲遺跡の発掘調査が行われた（盧　1980）。遺跡は青銅器を埋納した土坑（窖蔵）で，大小の鼎をはじめ斧・鏟・鎛・蚌鎌・釣針・鋸などの生産工具，刀・剣・矛・戈などの武器，盤や杯などの生活用具など，多数が検出された。各種の青銅器の特徴から，春秋時代晩期から戦国時代初期にかけての，奴隷主階級の貴族が用いたものであろうと考えられている。

出土の銅箸は２本で一組になっており，細長方形，残長20.3cm，幅４mmと報告されているが，これを実際に検討した劉雲は，断面が扁方形で，やや太めに作られた首部から足部に向かってわずかに細くなるとし，１本は現長20.3cm，断面３×４mm，首部幅４mm，足部幅３mm，もう一本は現長19.7cm，断面３×3.5mm，首部幅３mm，足部幅2.5mmと詳細に紹介している。盧が残長としていることと完存する他の諸例に比べてやや短いことを考慮すると，首部を欠いていると推測できる。盧茂村は本例を斧６，本来はスコップのような道具だが小形のためヘラのような使用法を考えうる鏟４，鎛４，手鎌のような用途をもつ蚌鎌４，釣針14，鋸２とともに，生産工具類に分類しているから，おそらくは火箸のような用途が考えられているのではと推測している。

山西省曲村の例は春秋時代晩期の東周墓に副葬されていた木製の箸で，木箸としては最古の出土例となる。青銅器や陶器（土器）とともに副葬されていたが，発掘調査によるものではないらしく，地元の農民から1994年に大連市の中国箸文化陳列館に譲られている（劉　1996）。10数本が出土しているが多くは折れていて，３本のみが原形を保っている。３本とも全長31.0cmと長さは揃っているが，扁方形の首部はやや違いがあり，６×5.5mm，6.5×5.5mmほどになる。足部に向かってやや細くなるものの，足部で5.5～５mmほどだから，首部と足部の太さにほとんど差のない寸胴形をしている。箸の表面の削りが雑で，削刀の当りの痕の凹凸がはっきりとしている。色調は烏木（黒檀）に近い

が，木質はそれよりも硬く，また重い。

折箸の出現　箸および箸と同じ意味をもつ筷・筯・筷……などの漢字には竹冠がつく。これからみると本来の箸，あるいは多くの箸は竹製であったと思われるが，現在のところ秦漢以前の遺跡から出土した２本で一組となる竹箸はない。

湖北省随州市城関鎮で発掘調査された曽侯乙墓は，春秋時代末期～戦国時代初頭（紀元前443年かややその後）に築造された，時期を特定できる好例である（楼　1989)。中室を中心に鍾65・磬32・鼓４・瑟12・琴２・笙６・簫（排簫）２・篪２の８種125点におよぶ楽器，鍾・磬・鼓を打ち鳴らすための槌などの打撃奏具を加えると，総計1851点もの楽器類が出土したことで知られているが，ここから３本の竹筷が出土している。筷は箸のことだから，最古の竹箸の出土例ということになるが，扁平に削った竹をＵ字形に成形したピンセット状のいわゆる折箸で，折箸日本起源説を再考させる資料になる[5]。

３本のうちの１本は提げ重箱のような形態の食具箱の中に入れてあった。箱は片側に銅罐と銅勺，そしてその上に竹筷が置かれていた。もう半分は方筒形盒など盒部と抽斗状になる小箱部６個に分けられていて，下段の小箱から果皮が出ている。竹筷は幅1.8cm の薄く仕上げられた竹材をＵ字形に折り曲げており，長さ29cm をはかる。他の２本は，細長く長方形に作られた酒具箱の中に，漆塗りで仕上げられた方盒，円罐形盒，耳杯などの酒器とともに入れられていた。箱の中で酒器と骨化していたが酒の肴の鶏および鯽魚（鮒）がほぼ半分に入れられていて，竹筷２と杓２は酒肴の上に置かれていた（図１－４）。２本とも同じ大きさで，長さ38.6cm，幅1.8mm をはかる（図１－３）。

これらから，食具箱・酒具箱はともに狩猟や野遊びなどの野宴に携帯されたもので食具であることは疑いない。しかし長さが29～38.6cmにも及ぶピンセット状の竹筷で酒の肴や果物を挟んで口に運ぶのは無理があり，今でも中国の市場に行くと見られるように，食材を挟む道具であろう。筷と杓が二組セットになっている点が気になるものの，食事用というよりも，酒肴を取り皿である耳杯に盛付けるための給仕用と考えられる。

食事用の箸の出現　中国の遺跡で出土した初期の箸を点検すると，春秋時代末期から戦国時代初頭にかけての時期に，確実に二本箸と折箸の双方がともに出現していることを確認できる。しかし，10数本まとまって出土した山西省曲村遺跡の木製の箸にしても，食具箱・酒具箱から食べ物とともに出土した湖北省曽侯乙墓の竹筴にしても，それが食べ物を食事・咀嚼のために人の口まで運ぶ食具であるということを出土の状況から証明できるにはいたっておらず，その証明は典籍に期待せざるを得ない。

先に湖北省香炉石遺跡出土の春秋時代の象牙箸を紹介した際に，戦国時代末期の紀元前233年に没した韓非らの著作集『韓非子』説林上篇や，それよりも古い戦国時代中期の紀元前340～前278年に生きた屈原の『楚辞』などの，食事用に象牙箸を作らせたことで殷の紂王の専横を予見した「紂為象箸」の故事を紹介したが，この故事から戦国時代には日常の食事に二本箸がかなり使われるようになっていたことがうかがわれる。もうすこし典籍をみておこう。

弟子入りした書生の修行に際しての規律が書かれている『管子』弟子職篇に，「先生有命，弟子乃食。歯以相要，座必盡席。飯必捧寧，羹不以手。」という部分がある。先生から食事をするように言われたら，長幼の順に席に座るが，その際席には前の方に寄って座る。飯は必ず手で捧げて持って指でつまんで食べ，熱い汁物である羹の具は箸・匙を使ってつまみ指で食べてはいけないという。同じことは『礼記』曲礼篇にも「凡進食之礼，左肴右饌，食居人之左，羹居人之右」「羹之有菜者用梜，其无菜者不用梜」とある。当時の飲食には配膳についても厳格な礼儀作法が定められていて，主食の飯は人の左，羹などの副食は人の右に置かれていたことがわかる。羹を食べる時には梜（箸）を使うのだが，汁物の中に菜（具）があったらそれを箸でつまみ，無かったら箸を使わずにすするようにというのだから，箸はおかず（副食）を挟んでつかみ食べるための道具として使われている。

曲礼篇には「飯黍毋以箸」ともある。これは飯や黍を食べる時に箸を使ってはいけないというのだから，飯や黍は手でつまんで食べていたことになる。ジャポニカ種の米は粘り気があるから，手でつまむと，指先や掌が米粒だらけ

になりかねない。現代中国を旅すると，ジャポニカ種の米であるにもかかわらず，パサパサした飯を食べることになる。これは火を着けると炊き上がるまで蓋を取らない日本の炊き方と異なって，煮沸の途中で糊成分の煮詰まった汁を捨て，新たな熱湯を加えながら炊く，湯取り法という炊き方に原因がある。それでも手にくっつくことがあるが，かなり粘り気が失われている。湯取り法は，おそらくは米の飯を手でつまんで食べていた時期の，米粒を手にくっつけないための炊き方の知恵であろう。そこで曲礼篇は「貴者匕之便也」，貴い者は飯や黍を食べる時に匕（匙）を使っても仕方が無い，つまり日常生活では飯や黍は匙を使って食べても良いが，正式の席では手で食べなさいと言外に説いている。なお，戦国時代には匜という青銅器が洗面器状の盤と組み合わされて汚れた指先を洗うために食卓に用意されていた。

前漢の宣帝のころに戴聖が集録した『礼記』のように前漢に入ってからの完成が考えられる典籍もあるが，紹介した内容からみて戦国時代には日常の食事において相当に箸が使用されていたことを示していると考えてよかろう(6)。

Ⅱ　食事用箸の定着と普及

馬王堆１号漢墓の箸　典籍の叙述は食事の道具としての箸の役割を明確に示しているが，実際に遺跡から出土する箸には食事用具としての用途を明示するものがある。その代表的な例として，湖南省長沙市五里牌の馬王堆１号漢墓から出土した箸がある（湖南　1973）。

今は周囲に家が建ちこんできたが，かつて五里牌の原野に２基の円墳が並び立ち，遠望できていた。1972年に発掘調査され，西側の２号墳は副葬品の時期観や「利蒼」玉印，「軑侯家丞」「長沙丞相」銅印の出土などから，長沙国の丞相で前漢恵帝２（紀元前193）年に軑国700戸の侯となった利蒼の墓であることが明らかとなった。東側の１号墳は，「軑侯家丞」封泥が多く出ることや，50歳ほどの女性の屍体があったことなどから，利蒼夫人であると考えられている。この１号墳に覆われる形で３号墳が1973年に検出されている。『老子』『戦国

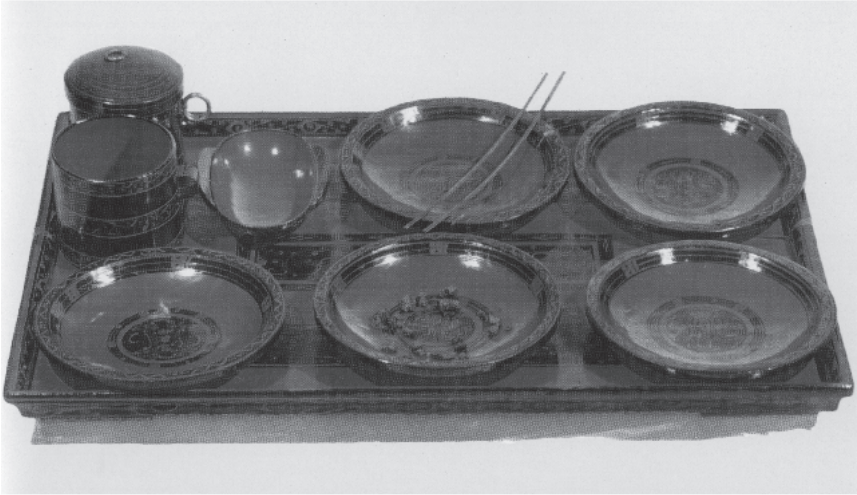
策』『左伝』などの帛書をはじめ多くの文字資料を出土したこの墓からは男性人骨が出ているので，利蒼の息子で早く亡くなった第２代軑侯利豨の兄弟にあたる人物のものであろう。墓室に納められていた木牘に「十二年二月乙巳朔戊辰　家丞奮移主葬」云々とあることから前漢文帝の12年，すなわち紀元前168年に埋葬されている。１号墳は直後にこれを覆って造られているから，利蒼夫人の没年は紀元前168年の数年後の，前漢早期のことと考えられる。

竹箸が出土した１号墳は直径40m，高さ16mほどの円墳で，墳頂から深く掘り下げられた墓壙に置かれた二重の木槨とその内部の四重に造られた木棺の中に，20枚ほどの衣服に包まれて夫人の遺体は眠っていた。地中深くに密閉状態で埋葬されていたことが功を奏して，遺体は弾力性をもち，内臓まで残るほど保存状態が良かった。このことと，棺上に置かれた龍に守られながら昇仙する夫人を描いた彩絵帛画が，１号墳を著名にしている。

１号墳の槨内には棺室の四周に1000件を越える副葬品を満載した辺箱があった。夫人の遺体の残りの良さから理解できるように，副葬品の残りも良かったが，頭部の北辺箱に夫人の生前の日常生活を思わせる品々が収められていた。そこにあった漆塗りの案の上に，食べ物が盛られた漆塗りされた小盤５，耳杯１，酒卮２が並べられていて，耳杯に一組の竹箸が置かれていた（図２－１）。写真でみると，箸もまた朱漆が塗られていたと思われる（図２－２）。報告書では，箸の長さを17cmとし，断面が扁平で，木質が軟らかいために実用品ではなく，明器であろうとしている。しかし劉雲は長さ24.6cm，幅３～２mmで，首部から足部にかけて厚みに大小があり，断面が扁方形であるとしている。箸と案の大きさを比較すると，箸の寸法は劉の指摘する通りであろう。また長い期間水漬けの状態にあった竹箸が軟らかになるのは当然で，形状や大きさからみてもしいて明器と考える必要はない。ともあれ，箸を含む案上のセットによって軑侯夫人ら貴族の食生活を垣間見ることができ，明器であるか否かは別にして，食事用に実用された箸の機能を確認することができる好資料である。

金雀山漢墓の箸　1983年に山東省臨沂市で南壜百貨ビルの建設にともない発掘調査された金雀山遺跡では９基の漢墓が検出されている（馮　1979）が，31

1　北辺箱に収められた漆案と箸・容器の出土状況



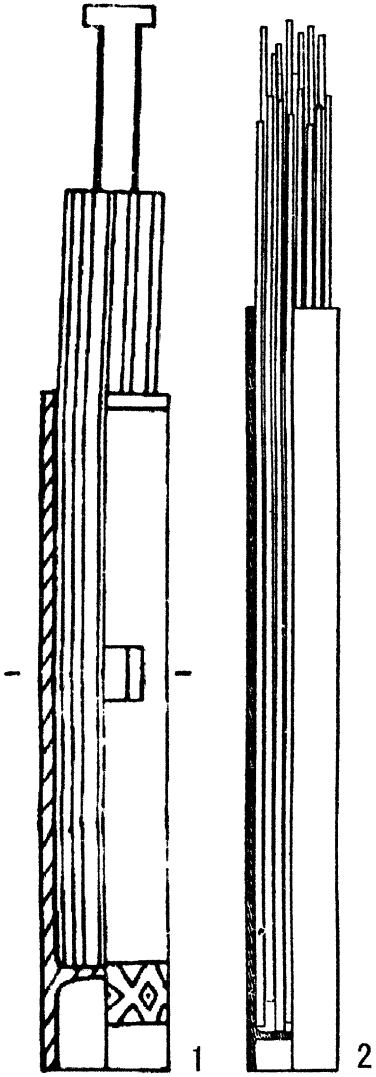
2　復原された食器の組合せ

図 2　長沙馬王堆 1 号漢墓の食具

号漢墓と32号漢墓から竹製の箸が出土している。両墓とも長方形竪穴に掘られた墓壙に１槨１棺が埋置された木槨墓で，墓室は棺室と副葬品を納める側室（辺廂）からなっている。31号墓の辺廂には，中央に陶罐・陶鼎・陶壺などの陶器（土器）類や六博局盤などの木器類が副葬され，その両側，つまり辺廂の両端に各種の食べ物を納めた竹笥が置かれていた。竹笥はわずかの残骸を止めるにすぎなかったが，中から盤・盒・耳杯・鉄勺とともに漆塗りされた竹箸一束が出土している。食べ物および食具とともに出土していることから，この箸は食事に用いられたと判断できる。32号墓の辺廂からも，中央部にあった銅製博山炉や漆盤とともに竹箸一束が出土している。両墓出土の竹箸は合わせて報告されていて，全体を黒漆で塗り，両端を朱漆で仕上げたもので，長さ22cm，直径５mmほどのものが約40本あった。31号墓は戦国時代末期から前漢早期，32号墓は前漢中～晩期に位置付けられている。

湖北省出土の箸と箸立ての資料　1992年に発掘調査された湖北省荊州市沙市区の蕭家草葉26号漢墓は棺材が完存する木槨墓で，槨内は棺室と副葬品を納める頭箱・辺箱に三分されていた（彭　1999）。副葬品には円盒・大楕円奩・盂・耳杯などの鮮やかな彩色と文様のみられる漆器類をはじめ木器や青銅器などがある。箸は辺箱から竹筒に収められた状態で出土している（図３－１）。筷籠すなわち箸入れ籠とされる竹筒は，片方の竹の節を残して底部とし，上端部は壁に掛けられるようにＴ字形状に削っている。表面に黒漆を塗り，口部と底部に黄金色の線で縁取りをして飾っている。ことに底部のそれは線の間に幾何学文を配している。また筒の内部も草花文で飾っている。中に収められていた箸は竹製で，長さ22.5cm，直径３～４mmのものが21本ある。報告には書かれていないが，首部と足部の太さが変わらない寸胴形で，断面が円形の箸と思われる。これは，食事後に洗った箸を厨房の壁や柱などに掛けた竹筒に挿し込んでまとめて保管するもので，私の青年時代まではどこの家庭でも見られた光景であったし，もちろん中国にも同じ光景があった。墓室の構造や副葬品の型式などから，馬王堆１号漢墓とほぼ同時期の，前漢早期と考えられている。

同様の資料は，1972年に湖北省雲夢県大墳頭１号漢墓でも知られている。こ



1：蕭家草場26号墓
2：大墳頭漢墓
(S＝1/2)

図3　箸と箸立て

れもまた完存する木槨墓で，頭箱と辺箱に完璧な保存状態の円盒・盂・盤・壺などの漆器や彩絵六博局盤などの木器，それに陶器（土器）・青銅器などが豊富に副葬されていた（陳　1981）。箸は辺箱出土の竹簪に収められていた。竹の節の一方を底部に利用した簡単な竹筒だが，口部は長方形に作られていた。簪は竹製の箸立ての意味をもつが，確かに中に16本の細長い竹箸が収められていた（図３－２）。長さ24cm，断面は円形で，直径３～２mmの，首部から足部にかけてやや細くなる円柱形をしている。この漢墓は1975年に発掘調査された秦始皇帝30（紀元前217）年築造の雲夢県睡虎地11号秦墓（陳編　1981）などとの比較から，前漢早期の墓と考えられており，箸もその時期の所産になる。

蕭家草葉26号漢墓と大墳頭１号漢墓で出土した筷籠・竹簪が箸立てであり，そこに納められていた細長い竹棒が箸であることは，湖北省江陵市鳳凰山遺跡の出土資料によって証明される。遺跡は楚の故都紀南城内にある戦国時代末期から前漢にかけての墓葬密集区にあるが，1973年に発掘調査された８号・10号漢墓（長江　1974）および1975年に調査された167号漢墓（鳳凰山　1976）・168号漢墓（紀南城　1975）から出土している。多くは長方形竪穴墓壙に１槨１棺が埋置された木槨墓で，墓室は棺室と頭箱・辺箱で構成されている。この遺跡では副葬品の内容を書いた木簡や副葬品の目録にあたる木牘が出土していて出土遺物と対照でき，用途を具体的に把握できる素晴らしさがある。ことに，他と異なり１槨二重棺の168号墓からは馬王堆１号漢墓の女屍のように保存状態の良い男屍が残っていたが，出土した木牘に前漢の県令の九級爵に相当する「五大夫」，さらに前漢文帝初元13（紀元前167）年にあたる「十三年五月庚辰」云々とあることから，この墓地群が前漢早期の県令級のものであることがわかっている。

具体的にみてみよう。まず，８号漢墓には竹箸１本を収めた箸立てが副葬されていたが，別に出土した木簡の「箸々筩一」と対応する。これと同様の箸立てと箸および木簡が167号漢墓からも出土している。木簡の一つ（遣冊六五）に「朼箸筩一〔枚〕」と墨書されていたが，それに対応して五装漆匕１と竹箸21本が出土している。24.5cmの長さに揃えられた竹箸は形状や大きさが大墳

頭１号漢墓のそれと同じとされている。墨書の「杞」は「枇」，すなわち匙であり，「筩」は竹の筒で，箸筩は箸立てをさす。したがって「杞箸筩」は匙と箸を入れる箸立てを意味する。箸と匙がセットになる出土例は少なく，食文化を考える好資料といえる。168号漢墓から出土した正面に赤色と黒色で幾何文を描いた彩絵箸立てには，側面に「枇笏」と墨書されていた。「笏」の意味がわからないが，形状と167号漢墓の比較から，箸立てであることは疑いない。長さ24.5cm，直径５～３mmで，足部がやや細くなる竹箸が10本出土している。10号漢墓からは箸は出土していないが，木牘に「圃一」と墨書したものがあり，実際に箸立てと思われる竹筒が出土していることから，圃は箸筩を意味すると考えてよい。

このように鳳凰山漢墓の資料によって，蕭家草葉26号漢墓や大墳頭１号漢墓からの出土例を含め，これらの竹筒あるいは箸筒などの容器が実際に箸立てであること，そして箸あるいは箸と匙がセットで収められていることから，食事に箸あるいは箸・匙を用いた後に洗って箸立てに収めて繰り返し使っていた様子がうかがえ，少なくとも支配者層には箸食が相当に普及していたことが示されている(7)。

竹箸と木箸　前漢の遺跡から出土した竹箸を紹介してきた。箸には梜という木偏の文字もあるし，春秋時代の山西省曲村遺跡からすでに出土しているので，前漢には出土例を欠くものの木箸の存在も考えられる。実際，先に紹介した『管子』弟子職篇では「梜」の字を用いている。『荀子』解蔽篇にも「従山上望木者，十仞之木若箸，而求箸者不上折也，高蔽其長也」，つまり山の下から山上の木を仰ぎ見ると，十仞もの高い木も箸のように短く見えるが，しかし箸を求める者であっても誰も登っていってそれを折ろうとはしないのは，山の高さが木の長さをわかりにくくしているからであると，物事の実態を確認しないで是非を決めることの危うさを高い山の上にあるため短く見える木と箸を比較して指摘している個所がある。荀子は戦国時代末期の人だから，これからみると前漢以前から実際には木箸もかなり普及していたと思われる。

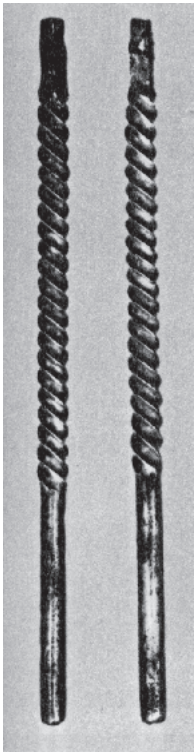
銅箸と銀箸　後漢の出土箸の多くは銅箸になる。その銅箸は１例にすぎない

が前漢にもある。雲南省祥雲県大波那村で，長方形竪穴の墓壙に切妻の屋根をもつ4間×2間の高床建物を象った銅棺が収められた木槨墓が発掘調査されていて，青銅製の剣・矛・鉞などの武器類，犂頭（鋤）や鏟などの農具類，鼓・葫蘆笙・鍾などの楽器類，家屋や馬・牛・羊・豚などの模型，そして尊・豆・杯・杓・釜・匕などの生活用具とともに出土した銅箸3本が注目される（熊・孫　1964）。いずれも円柱状に作られた首部にくらべて足部がやや先細になる箸で，2本一組となる例は長さ28cm，首部の直径4mm，対の1本を失っている例は長さ24cmをはかる。前漢中期と考えられている。

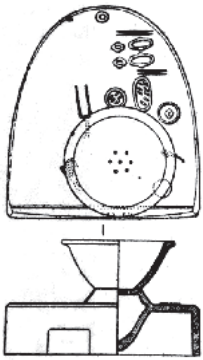
河北省保定市満城陵山の尾根上にある満城1号漢墓は，元鼎4（紀元前113）年に没した，景帝劉啓の子で武帝劉徹の庶兄にあたる中山靖王劉勝の墓として知られ，隣接する夫人の竇綰が眠る2号漢墓とともに1968年に発掘調査されている。文化大革命の最中だったために公表が遅れたが，1967年以来休刊していた考古学専門雑誌『考古』が復刊するにあたり，その第1号である1972年1期に収録された記念碑的な遺跡でもある。

盗掘を受けていなかった1号漢墓からは，金縷玉衣や鎏金「長信宮」銅灯火などの数々の豪華な副葬品が出土しているが，ここから銀箸形器と名付けられた銀器が3点出土している。首部を方柱状に作り，螺旋状にひねられたやや膨らみをもつ握り部，そして足部は円柱状になるが，全体としては寸胴形に近い。首部に孔が穿たれている。長さ11.6cm，直径4.5mmで，形状から箸の可能性が指摘されている（図4－1，盧　1980）。折れているとは書かれておらず，図版をみても完存していると思われるから，明器的な用途の箸であろう。

前漢の箸の特徴　以上紹介してきたように，前漢の食事用に用いたことが確実な箸の長さは22～28cmの範囲にあるが，ほとんどが24.5cm前後で揃うことが注目できる。また，商代～春秋時代以来の扁方形のものもあるが，断面円形のものに形態的に統一されてくる。出土地も竹器・木器の保存環境が優れている湖北省ばかりでなく，山東・河北・湖南・雲南の各省に広がっている。これに，陶製の灶（竈）の上面に盤・耳杯・叉（フォーク）・匕（匙）などとともに箸の形状を刻んだ前漢晩期の甘粛省臨夏市大河荘6号漢墓（図4－2，



1



2

図 4　銀 箸 と 陶 灶
1：満城 1 号漢墓の銀箸，2：甘粛大河荘 6 号漢墓の陶灶

鄭　1961）や，塼で作られた灶の上に実際に火箸と考えられる鉄箸 2 本が置かれていた河南省洛陽市焼溝村の卜千秋墓(黄　1977)を加えると，山東・河北・河南・湖南・湖北・雲南・甘粛といっそうの地域的広がりがみられるようになる。

Ⅲ　箸の性格と用途

後漢の箸の考古資料　王莽新～後漢になると箸の使用はいっそう普及する。

新疆ウイグル自治区民豊県の尼雅（ニヤ）遺跡で，漢代精絶国の貴族の住居と考えられる遺跡が1959年に発掘調査されている（佟　1991）。その厨房あるいは食事用具の置き場とみられる１室から，麦・青裸・黍（糜穀）・干蕪（干蔓蕪）・干羊肉・干羊蹄などの食料品，葦製の鍋や桶などを洗うササラ（炊箒）や鍋敷きと思われる羅圏，それに羊肉などをぶつ切りにするのに用いたらしい鉄斧などとともに，木箸と木匕（木匙）が検出されている。報告に添えられた写真に木箸２本がある。長さなどの寸法はわからないが，太い首部から足部に向かってかなり細くなる先細の箸である。

後漢代の遺跡から出土する木箸は今のところ尼雅遺跡例しかないが，後漢の領域のもっとも西から出土した資料となる。他に，河南省洛陽市澗西七里河後漢墓など表１に示した墓から出土しているが，副葬の状態から箸の用途を推測できる例がある。

1972年に発掘調査された洛陽市七里河後漢墓は前室・後室（棺室）・北耳室などからなる塼室墓で，出土遺物の型式や五銖銭の特徴などから後漢晩期に分類されている（余　1975）。副葬品が納められた前室には床よりも５cm ほど高い塼製の台部が作られていて，その上に人間や動物がさまざまな姿態をとる十三支灯，６人の楽器奏者や七盤舞を踊ったり逆立ちや滑稽なしぐさをする人物などの陶製の百戯侵俑など，その西側に長方形の陶案があった。案の上には耳杯６個，周りには魁２個と円盤・耳杯各１個，それに羊の頭などがあり，座る位置からすると手前側に銅箸一組と銅刀１口があった（図５－１）。箸は現在の日本の箸の置き方と同様に，身体に対して平行に置かれていた。首部を朱で塗られた箸は長さ16cm，直径５mm と短い。出土資料一覧表に「筷」とのみ記された箸は，材質を示さないものは陶製であるという注記からみて，陶製であろう。

広州市には広州漢墓とよばれる漢墓群があるが，1960年に発掘調査された夫婦合葬の広州5054号塼室墓から銅箸が出土している（麦　1961，朱　1981）。墓室は副葬品を置いた前室と棺室である後室からなるが，後室への入り口部分に長方形，その両側に円形の三つの銅製案があった。銅箸は円案の上に耳杯と

表 1　新莽・後漢の箸出土遺跡

遺跡名	材質	個数	長(cm)	幅(mm)	出典
河南省洛陽市澗西七里河後漢墓	陶	1 組	16	5	余 1975
陝西省興平県西呉郷斉家坡村咸陽織布廠 11 号新莽墓	陶	1 組	(11)	6	孫・賀 1995
湖南省長沙市仰天湖 8 号後漢墓	銅	1 組	35.2	6～5	劉 1996
湖南省長沙市東屯渡後漢墓	銅	1 組	22.1	4.5	劉 1996
湖南省益陽市羊舞嶺 1 号後漢墓	銅	1 本	(16)	3	盛 1984
湖南省湘郷県紅崙上韶湘 92 号新莽墓	鉄	1 組	23	5	劉 1978
			20	3	
広東省広州市先烈路沙河頂広州 5054 号後漢墓	銅	2 組	25		朱 1981
広東省広州市先烈路黄花崗広州 5064 号後漢墓	銅	1 組	25	6	朱 1981
広東省韶関市郊 8 号後漢墓	銅	1 組			楊 1961
雲南省昭通市桂家院子 1 号後漢墓	銅	2 組	19.6		雲南 1962
			22.7		
雲南省大関県漁堡後漢崖墓	銅	1 組	20.3	3.2～2	劉 1996
雲南省大関県岔河 1 号後漢墓	銀	1 組	20	3	張 1965
四川省綿陽市何家山 2 号後漢崖墓	銅	3 組	22	—	何 1971
四川省大邑県鳳凰郷後漢墓	銅	4 組	22.7	4～1.5	劉 1996
甘粛省酒泉市下河清 18 号後漢墓	銅	1 組	17	—	甘粛 1959
新疆ウイグル自治区民豊県尼雅遺跡住居跡	木	1 組	—	—	佟 1991

ともに置かれていたが，ことに北側のそれは植樹の際に取り上げられていて，原状がわからない。南側の円案に一端をもたせかけたような状態で出土した例（図５－３）は，円柱形で現代の箸と変わらないとされているから，寸胴形であろう。かなり腐食しているが，長さ25cm をはかる。5064号塼室墓からも銅箸一組が出土しているが，撹乱のため，出土状態はわからない。長さ25cm，直径６mm をはかる。いずれも後漢晩期の墓である。このほか，東山三育路にある同時期の広州5032号後漢墓の墓室平面図をみると，陶案の上に陶小盒６個とともに箸一組が置かれているようだが，報告にはない。

昭通市は貴州省と四川省に食い込むように延びる雲南省東北部にあるが，ここにある円墳群のうちの１基（桂家院子１号墓）を1960年に発掘調査したところ，塼築の長方形単室が２つあり，その１号室から銅箸が検出されている（雲南　1962）。１号室は夫婦合葬で，奥側に夫婦の朱塗り木棺の残片があった。棺の手前に，双耳壺・双耳釜・鳳凰形盉・釜甑など多数の青銅器や陶器（土器）などの副葬品が多数置かれていたが，ことに銅銭や人物・龍などを樹枝状にあしらった銅製揺銭樹は珍しい。銅器の中に長さ42.7cm，幅64.1cm，高さ14cm の銅案があり，その上に銅製の耳杯７・椀１・箸二組があった（図５－２）。耳杯の１つには鶏骨，他の１つには魚骨が盛られていた。案の上に置かれた栗の実もあった。箸は広州5054号後漢墓と同様に案に一端をもたせかけるようにして置かれていた。一組の箸は首部を方形に作り，足部にかけて円形におさめている。長さ19.6cm。他の一組は円柱状（寸胴形）で，長さ22.7cm をはかる。生活用具や飲食用具などの遺物は漢族のものと変わるところが無く，漢族や地方の大豪族と密接な関係をもつ一族であろうと推測されている。

綿陽市何家山で1990年に発掘調査された後漢晩期の２号漢墓も，墓室の奥に塼を積んだ棺台が２ヵ所作られた，夫婦合葬墓である（何　1991）。そのため銅器や陶器などからなる副葬品は手前に置かれている。長さ115cm，高さ134cm の大形の銅馬や銅揺銭樹が目立つが，副葬品群のほぼ中央に長さ41cm，幅61cm，高さ14cm の，蹄脚の足をもつ銅案があり，案の上に銅製の耳杯７・盤２・箸三組が並べられている（図５－４）。案の前側に盤を重ね，その両側に大形の

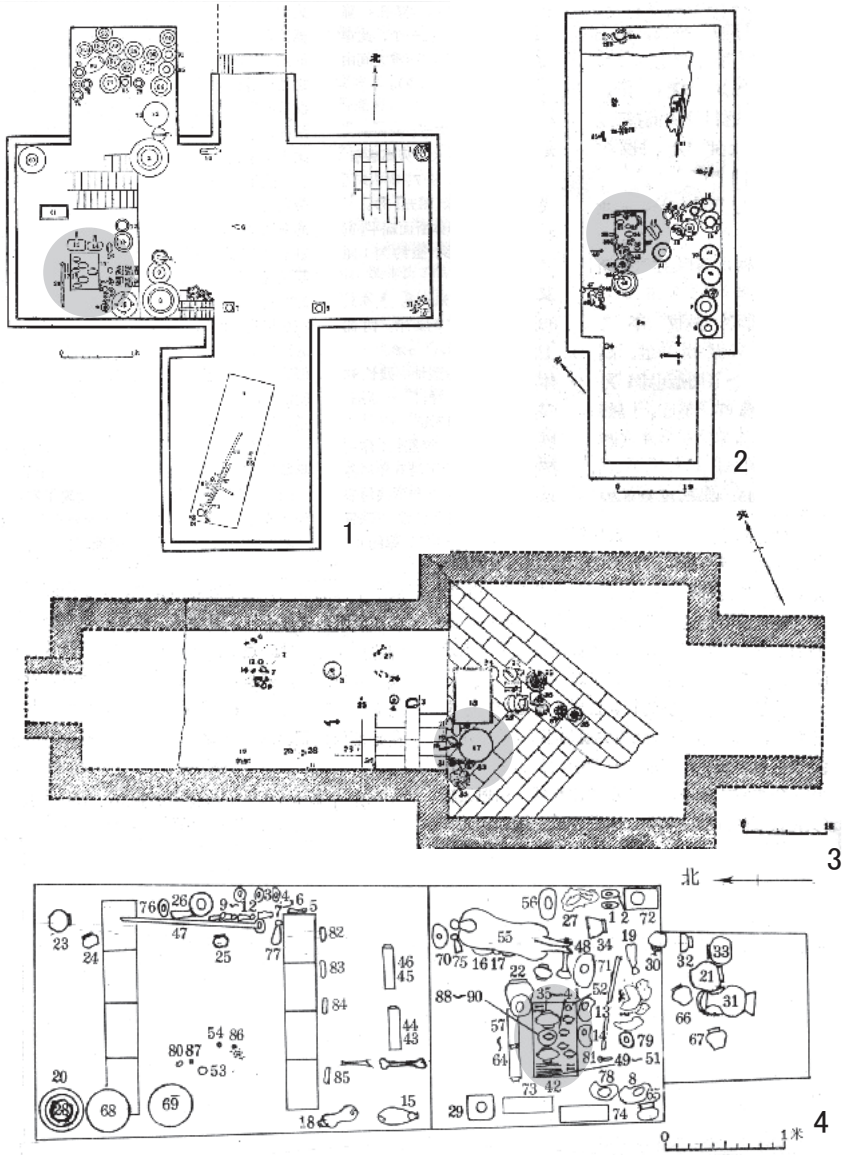


図５　後漢墓に副葬された案と箸・耳杯
１：七里河墓，２：桂家院子１号墓，３：広州5054号墓，４：何家山２号墓

耳杯，右端に箸三組，後列に小形の耳杯５個が配されていた。箸の長さは22cmをはかる。奏楽俑や舞踏俑をもつ点は洛陽七里河後漢墓，動物俑や家屋の模型，それに揺銭樹をもつ点では昭通桂家院子１号墓に通じている。

画像資料に見る厨房の光景　後漢墓に副葬された案・耳杯そして箸がどのように使われていたかは，支配者層の食生活を画像として表現した，壁画墓や画像石・塼墓からうかがえる。それらから彼らの厨房や宴会の様子を覗いてみることにしよう（田中　1985，渡部　1991）。

四川省成都市で採集された画像塼（図６）は典型的な庖厨図として知られている（龔・龔・載　1998）。上段に描かれる屋根の下，壁側にある肉架に干魚４尾と鶴か鷺のような首の長い鳥が２羽鉤で吊るされている。中段の右手には，他の例からみて羊と思われる動物が杖をついた老人に引かれてきているが，この羊は解体される運命にある。左手には，脚付きの俎板の前に正座した調理人がいて，魚をさばいている。魚は後ろの肉架に吊り下げられていた干魚だろうか。下段の右側では，台を挟んで立つ２人が中央の穴に据えられた底の尖った甕状の容器の中を押しているが，これは酒を濾しているところで，台の下に置

図６　厨房の光景

かれた容器に溜めている。中央には鉢状の容器の中で料理の素材を下拵えしている人物がいる。そのすぐ左に犬が座っているが，犬を調理する図もあるから，この犬も調理人の愛犬ではなく食材であろう。左側には，竈に甑と釜が置かれ，ご飯が蒸されている。竈の火口の前では正座した人物が火吹き具で焚木に風を送って火をおこしているが，火吹き竹で風を送るのは私の少年時代は子供の仕事だった。

この構図は四川省から遠く離れた山東省の嘉祥県蔡氏園・肥城県・微山県微山島溝南村などで出土した画像石などでもみられるから，厨房の実景描写というよりも，何らかの故事説話を図像化したものであろう。しかし庖厨図中もっとも多人数の使用人が忙しく立ち働く山東省諸城県前涼台の孫琮墓の画像石にみられる厨房（蒋・呉・関　1982）も基本は同じであり，後漢代の支配者層の厨房を彷彿とさせている。

河南省新密市打虎亭村の２基の円墳からなる打虎亭漢墓は日本の前方後円墳の祖形ではないかと一時注目を集めたことがある。1960年に発掘調査され，西の１号画像石墓が後漢晩期に弘農太守であった張徳（字は伯雅），２号壁画墓はその婦人の墓であることが明らかとなった（楼　1993）。両墓ともに画像資料の宝庫だが，上級官人層の厨房を描いた傑作でもある。

１号墓は墓室を塼で築造し，その内壁を覆う石板に画像を彫りこんでいる。棺を置く後室（主室）の他に前室，中室，東・南・北の３耳室からなる規模の大きな墓室で，地上の大邸宅を地下に再現している。東耳室は入り口を除いた東・南・北の３壁に厨房の様子が石刻されている。まず西壁には食具置き場が描かれていて，右下に置かれた屈曲するアーチ形の脚をもつ机（テーブル）の上に置かれた盤に箸が載せられている。南壁と北壁には多数の男女が忙しく働く厨房が再現されている。北壁東幅は調理場の光景だが，上部中央に屋根形の厨櫃（食器棚）があり，その前に座る人物が案の上に置かれた耳杯とみられる器に出来上がったご馳走を盛り付けている（図７）。その左側には蓆が敷かれ，ここでも２人の女性が器に盛り付けているが，左の女性の手に箸が握られている。北壁西幅では，上方に細長い机が置かれ，右から２人目の女性が箸で，３

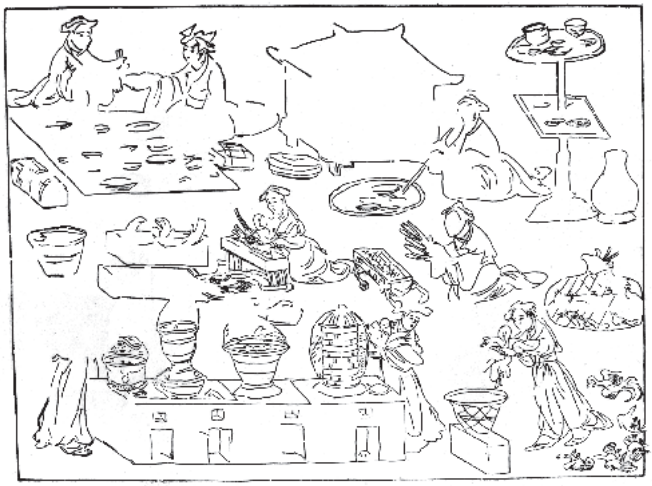


図 7　厨房の忙しさを再現した打虎亭１号漢墓の画像石

人目の女性は勺で，食器にご馳走を取り分けている。下方には蓆が敷かれ，ここでも食べ物が食器に盛られているが，左から３人目の座った女性が箸で取り分けている。

三方の壁が厨房の画像で埋まる打虎亭１号漢墓（弘農太守張徳墓）東耳室は地上の邸宅の厨房の再現であり，現代の菜箸と同様に，箸が調理そして配膳の道具として活用されていたことを示している。

食事に用いられる箸　張徳夫人が葬られた打虎亭２号漢墓は華やかな色彩で描かれた壁画墓だが，四合院様式の邸宅でいえば中庭にあたる中室東段，主室（棺室）と北耳室への入り口が並ぶ北壁の上部に横幅7.34m もある宴飲図が描かれている。左端に墓主と思われる人物がおり，その右に宴席が上下２列並んでいる。宴席の間では楽器を奏でる楽人や舞い踊ったり雑技をしている芸人が，それぞれに持ち芸を披露している。宴席に座る客の前には朱漆塗りの円形の案（盤）が置かれている。正報告書には書かれていないが，概報に「席前絵有杯盤碗箸之属」とある（安・王　1972)。壁画の保存状態があまり良くなく，案の状態がよくわからないが，幸い表紙を飾っている宴席の中ほどの部分で箸を確認できる。

ラッパ状の吹奏楽器を吹く人物と長い柄で床に置かれた太鼓を叩く人物，宴席でそれを楽しむ３人の客の間に，外面を黒漆，内面を朱漆で塗られた案や盤があるが，その１つの中には耳杯が５個ほど置かれ，縁にもたせかけるようにされた朱塗りの箸がみえる（図８）。案に大小はあるが１人１膳で置かれており，箸が調理用でもなく，給仕用でもなく，個人用の食具として使用されていることをうかがわせている。

同じような宴飲図は，内蒙古自治区和林格爾県の新店子１号後漢墓の中室北壁に描かれた楽舞百戯図にもある。図の残りは良くないが，６人の人物の前に置かれた案に耳杯が載せられ，やはり箸がもたせかけられている（内蒙古　1978)。この墓には，北耳室東壁にも宴会の食べ物をこしらえる場面があり，ここでは箸は調理に使われている。この墓は郡太守に匹敵する使持節護烏桓校尉を務めた高級官僚のものだから，その宴席も壁画にあるように豪華なも

図 8　打虎亭２号漢墓の壁画にみえる宴席の案の上の箸と耳杯

のであったろう。

遼寧省遼陽市は前漢代に遼東郡治襄平県の故地であり，前漢によって蕃国の王の死に対して与えられる葬具の下賜を受けた福岡県三雲南小路墳丘墓や倭の諸国からの使いが「以歳時来献見」したと伝える『漢書』地理志の記事からうかがえるような関係からすれば，倭からの使節が通過したに違いない要衝である（高倉　2008）。この遼陽市で1956年に発掘調査された棒台子２号壁画墓にも食の光景がある（王増新　1960）。

棒台子２号墓は後漢と魏が交替するころに築造された石槨墓で，墓室内には２棺一組になる棺室が２室あり，合わせて４棺が東西に並べてあったが，遺存していた人骨から判断して少なくとも６人が埋葬されていた。すでに盗掘を受けていて副葬品はあまり残っていなかったが，各壁が車騎図・車列図・楼宅図，さらには主簿・議曹掾と墨書された人物図などの壁画で飾られていた。議曹掾は郡官・県官，主簿は県官にある職種で，これらの中級役人が伺候しているところから，墓主はおそらく郡の高官だったのではないかと思われる。

宴飲図は棺室の西南側にある西耳室の奥壁にあり，垂れ絹で飾られた引き幕（帷幕）の下での墓主夫妻の食事の場面が描かれている（図９－１）。それぞ

れ幅広の縁台のような床几（榻）に座る夫妻の間には卓があり，その上にある紫紅色の円形の案に耳杯７個と箸二組が置かれている。案の両側にも小盤があって，食べ物が盛られている。実際に，盗掘で荒らされていたが，西耳室から円形の陶案と漆器の耳杯残片が出土している。夫妻の両側には配膳や給仕にあたる男女５人がおり，墓主の左の女性の後ろには「大婢常楽」の４字が墨書されている。

山東省沂水県韓家庄で1972年に発見された画像石の下段にも宴飲図がある（蒋・呉・関　1982)。琴・鼓・排蕭を奏でたり，長袖舞・倒立・お手玉（跳丸）などの芸人に囲まれるように，中央の２人は宴に興じている（図９－２・３)。２人の間には円案があり，耳杯９個と箸一組がある。左側で琴を弾じている楽手の上方にも円案があり，耳杯６個と箸一組がある。２人の宴席だが，楽手芸人の数を考えれば，豪華な宴会であることには変わりない。

四川省新都県馬家で1972年に発掘調査された馬家３号後漢墓はすでに盗掘によって撹乱を受けていたが，４壁に画像塼が組まれていて（王有鵬　1980)，その１つに宴飲図がある[8](図９－４)。この，家屋の中で３人が談笑している宴席の構図の塼はすでに知られていたが，副葬品の陶俑・陶器や五銖銭などから後漢晩期から蜀漢にかけての時期のものであることが判明した。宴席の様子は，中央の主人の前に４脚をもつ案があり，その両側に脚が座っている。案には耳杯５個と箸二組が置かれている。左側の客は左手に箸が添えられた耳杯をもっていて，主人に渡そうとしている。右側の客は花のようなものを，これも主人に贈ろうとしている。少人数の宴席の様子をうかがわせるとともに，３人に対して三組の箸があるから，各人が自らの分の箸を使って食事していたことがわかる最初の例になる。

もっと具体的に箸の使い方を示す画像がある。山東省嘉祥県武梁村にある，土地の豪族武氏一族を祭る祠堂に収められた画像石で，邢渠が食べ物を口元まで箸で運び食事の世話をしている，「邢渠哺父」の故事が刻まれている（図10，徐　1957)。右手に食べ物のはいった魁をもち左手にもった箸で食を進めている点はいかにも自然だが，二本箸の表現がかなり短めで，左手である点やつか

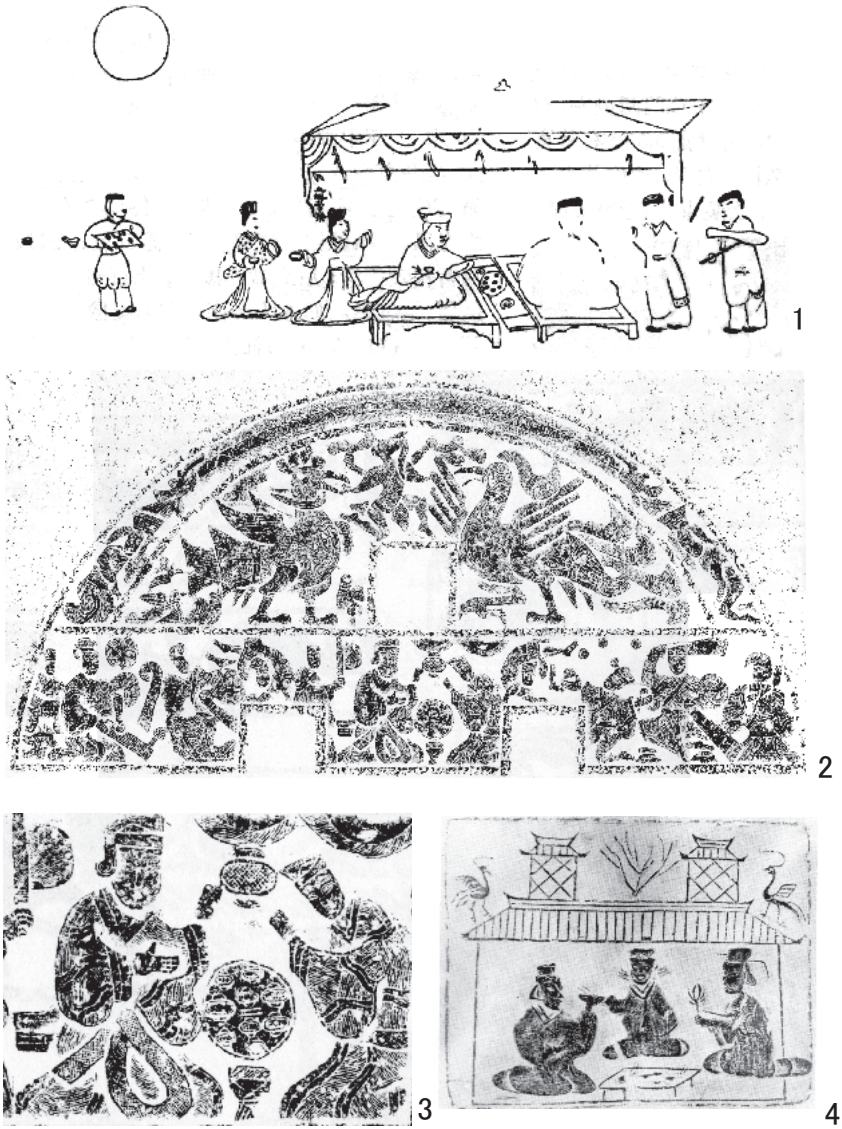


図9　少人数の宴席
1：棒台子２号墓，２：沂水武氏祠，３：２の部分，４：新都馬家３号墓

図10　「邢渠哺父」図にみえる箸の使い方

み方にも不自然さがみられ，折箸の可能性を考慮しておく必要があろう。同様の構図の箸使いの図が武氏祠にはもう１例あるが，そちらには「邢渠哺父」と刻まれている。

食文化の中の箸　実物や画像などの考古資料を通じて知られる後漢の箸は，高級官僚を中心とした彼らの豪華で奢侈な彼らの宴会の描写に限られてはいるが，箸の使われ方が具体的に理解できるようになる。彼らは調理に，そして飲食に箸を活用している。

棒台子２号後漢墓壁画に描かれた宴飲図には案に耳杯と箸が並べられているが，先に紹介した実物資料を紹介した発掘調査の事例でも案の上に置かれるのは耳杯と箸であり，使用法が一致している。さらに，棒台子２号壁画墓の案の上にあった耳杯７個と箸二組の組み合わせは，雲南省昭通市桂家院子１号墓に同じ耳杯７個と箸二組を並べた例があり，四川省綿陽市何家山２号墓でも耳杯７個と箸三組・盤２個が組み合っていた。他の例も耳杯は５～８個前後であり，食事に出す食具の数にある程度の作法あるいは約束事があったのかもしれない。

後漢になると，商代～前漢代に箸の出土が知られていた山東・河北・河南・山西・安徽・湖南・雲南・甘粛の各省に加えて，遼寧・陝西・広東・四川・内蒙古・新疆の各省・自治区へと実物あるいは画像資料によって箸使用を確認できる領域がさらに拡大する。この広がりは箸使用が後漢のほぼ全領域に及んでいることを意味している。その反面，前漢代まで出土資料が集中する感のあっ

た湖北省からの出土を聞かなくなる。おそらくこれは，箸の主な出土遺構である墓室の構造が，木槨墓から塼室墓へ変わることに原因があるように思われる。出土資料に限れば，箸の材質も竹から銅に変化している。これは木槨墓がそれを構成する木材を良好に保存する水分に恵まれた環境に築造され，竹や木を素材とする箸の保存にも適合していたのに対し，後漢代になると木質素材の保存に必ずしも適していない塼室墓にかわり，それにともなって墓の立地環境も変化した結果であろう。後漢に銅箸が増加するのは，竹箸・木箸に後代に箸の主要な素材となる銅箸が新たに加わった結果であろうが，平均の長さが22cm 前後に減じていることを考慮すれば明器である可能性も否定できない。実際の生活の場では，新疆ウイグル自治区尼雅遺跡の住宅遺跡から木箸が出土しているように，竹箸や木箸が使用されたであろうことは容易に推測できよう。

武氏祠の「邢渠哺父」図で明らかなように，箸は食べ物と人の口を結び，人に摂食させる役割を果たしている。しかしどのような食べ物を挟み，人の口まで運んだのかという問題は，画像資料にしても宴飲の場面であるため，確認できない。ご飯は指先でつまむものであって，箸はおかず（羹，副食）を食べる時に使うという礼儀作法が後漢にも継続していることは，典籍によって理解できる。宴飲図あるいは出土資料で案の上に箸はあるが，匙は一例もみることができない。それは宴席が空腹を満たす食事の場というよりも，まさに宴会で，そこに出される料理は酒の肴であり，箸だけで事足りたということであろう。それは羹に代表される副食をつまむ道具としての作法にかなった箸の役割にほかならない。

それが箸の本来の役割であったにしても，礼儀作法は時々変化する。箸も同様で，前漢には日常生活では匙でご飯を食べてもよくなり，現代の韓国にみられる食の作法に近づく。さらに紀元100年ごろに許慎が撰した最古の部首別字書である『説文解字』には，箸は「飯𣪘也」とある。清代に段玉載がこれを注釈した『説文解字注』（段　1981）には，「𣪘」には傾くという意味があり，箸はかならず傾けて使うから「飯𣪘」というとある。「𣪘」を持ち去るという意味の「敧」とする書もあるが，諸橋徹次の『大漢和辞典』によれば，「𣪘」に

は傾くという意味とともに，持ち去る，挟みとるという意味があり，「敧」と「攲」は通用するとする。したがって「飯敧也」は箸が飯を挟む食具であるという意味になる。この『説文解字』の「箸」の説明は，後漢には箸が飯を挟む道具として使用されたことの述べていて，手食もしくは匙食に限られていた飯の食べ方に新たな方法が現れたことを示している。現在のような箸を使ってご飯を食べる習慣が後漢に成立していた可能性を示しておりきわめて重要であるが，残念ながら考古資料で確認するにはいたっていない。

＊　　＊　　＊

商代に使用がはじまる箸の資料を通観してきた。２本の棒で物を挟むという用途をもった箸は，火箸あるいは菜箸（調理用箸）として使用が開始され，戦国時代ごろから食べ物を人の口まで運ぶ食事用の道具として定着する。前漢・後漢遺跡出土の実物資料だけでは確認できない部分を後漢の壁画墓や画像塼・石墓によって補うと，開始以来の火箸・菜箸・食事用の３つの機能は使用が継続していることを理解でき，それが東アジアでは現在まで連綿として継続し，独特の箸食文化圏を形成している。

ただ箸の使い方や置き方を微視的にみると，中国・韓国・日本ではそれぞれ異なっている。同根の箸文化がどのような原因・契機で異なってくるのかの解明が次の重要な問題になるが，それは稿を改めて論じることにしたい(9)(10)。

註

(1) 中国では箸を「筷」や「筷子」という場合が多く，論文や発掘調査報告にも半々程度に使われている。本稿では煩雑さを避けるため，原文を引用する場合を除いて，箸に統一している。

(2) 箸を握る部分を首部，食物を口に運ぶ部分を足部と称することにする。

(3) 箸の長さなどの数値や材質について王・張　1995 は報告していないが，劉雲が数値および牙製と報告された例が象牙製であることを述べている（劉　1996）。なお，以下に紹介する出土例には長さなどの数値が報告されていないものがあるが，劉雲の論文にしたがって追記しているものがある。

(4) このほかに，当初春秋時代中晩期とされた雲南省祥雲県大波那銅棺墓から銅箸 3 本の出土が知られている（張　1964）が，この調査者の時期観に太田昌子が異論

を唱えている（太田　2001）。しかし異論を唱えるまでも無く，この時期観は同年のうちに前漢中期をさかのぼらないと訂正されている（熊・孫　1964）が，春秋時代の資料として考えられている傾向にある。

(5) 大阪府豊中市島田遺跡で折箸を検出した鳥越憲三郎は，大宝令で大嘗祭が大儀として定められた 701 年に初めて作られたとして，日本での創案を考えている（鳥越　1980）。正倉院宝物に銀製 1・銅製 79 の鉗（かなばさみ）とよばれる金属製の折箸がある。『法隆寺資財帳』などに「釳鉗」と併記され，箸に相当すると考えられている（関根　1969）。正倉院の鉗がどこの製品であるかはわからないが，外国製であればもちろん，そうでなくとも折箸日本起源説は再考する必要がある。なお，鉗子という用語のピンセット状の医療器具が今もある。

(6) 典籍にあらわれた箸についての紹介は，『箸の源流を探る』（太田　2001），『箸』（向井・橋本　2001）に詳しい。

(7) 前漢末期に楊雄が編纂した『方言』に各地方の言葉が収録されているが，箸と匕を入れる箸筩について「箸筩陳楚宋魏之間謂筲或謂籯，自関而西謂之桶楶」というと紹介されている。黄河流域に沿った中原の陳・宋・魏およびその南の楚では筲あるいは籯，函谷関より西では桶あるいは楶ということが紹介されている。ここにも庶民にいたる箸食の普及が語られている。

(8) たとえば同じ構図で同形同大の塼が四川省成都市郊採集（龔・龔・載　1998）や出土地不詳（高　1987）で知られている。

(9) 物を挟むという箸の大原則からは逸脱するが，『戦国策』斉策に斉の首都臨淄で娯楽の一つであったと記される盤上遊戯「六博」のサイコロの役割を果たす竹を半裁したような形の棒も「箸」とよばれている。六博は春秋時代末から戦国時代にかけてすでに存在し（渡部　1991），後世の御籤や卜占などの食に関係しない箸の先駆けとなっている。これもまた改めて論じることにしたい。

(10) 本稿で使用した図は事例紹介の際に引用した報告・報告書・図録から作成した。

引用文献

安金槐・王与剛　1972「密県打虎亭漢代画像石墓和壁画墓」（『文物』1972 年 10 期）

雲南省文物工作隊　1962「雲南昭通桂家院子東漢墓発掘」（『考古』1962 年 8 期）

王　増　新　1960「遼陽市棒台子 2 号壁画墓」（『考古』1960 年 1 期）

王　有　鵬　1980「四川新都県発現一批画像塼」（『文物』1980 年 2 期）

王善才・張典維　1995「湖北清江香炉石遺址的発掘」（『文物』1995 年 9 期）

太田　昌子　2001『箸の源流を探る』汲古書院

何　応　国　1991「四川綿陽何家山 2 号東漢崖墓清理簡報」（『文物』1991 年 3 期）

甘粛省文物管理委員会　1959「酒泉下河清第 1 号墓和第 18 号墓発掘簡報」（『文物』1959 年 10 期）

紀南城鳳凰山一六八号漢墓発掘整理組　1975「湖北江陵鳳凰山一六八号漢墓発掘簡報」（『文物』1975 年 9 期）
湖南省博物館・中国科学院考古研究所編　1973『長沙馬王堆一号漢墓』文物出版社
高　　文編　1987『四川漢代画磚集』上海人民美術出版社
黄　明　蘭　1977「洛陽西漢卜千秋墓発掘簡報」（『文物』1977 年 6 期）
龔廷万・龔玉・載嘉陵編　1998『巴蜀漢代画像集』文物出版社
朱　重光編　1981『広州漢墓』（中国田野考古報告集考古学専刊乙種 21 号）文物出版社
徐　家　珍　1957「関于“匕和鼎，鬲的関係”」（『文物参攷資料』1957 年 5 期）
蔣英炬・呉文祺・関天相編　1982『山東漢画像石選集』斉魯書社
盛　定　国　1984「益陽羊舞嶺戦国東漢墓清理簡報」（『湖南考古輯刊』2）
関根　真隆　1969『奈良朝食生活の研究』吉川弘文館
孫徳潤・賀雅宜　1995「咸陽織布廠漢墓清理簡報」（『考古与文物』1995 年 4 期）
田中　　淡　1985「古代中国画像の割烹と飲食」（『論集東アジアの食事文化』）平凡社
高倉　洋彰　2008「遣漢使節の道」（『九州大学考古学研究室五〇周年記念論集』仮題，印刷中）
段　玉　載　1981『説文解字注』上海古籍出版社
張　増　祺　1964「雲南祥雲大波那発現木槨銅棺墓」（『考古』1964 年 7 期）
張　増　祺　1965「雲南大関，昭通東漢崖墓清理報告」（『考古』1965 年 3 期）
長江流域第二期文物考古工作人員訓練班　1974「湖北江陵鳳凰山西漢墓発掘簡報」（『文物』1974 年 6 期）
陳　振　裕　1981「雲夢大墳頭 1 号漢墓」（『文物資料叢刊』4）
陳　振裕編　1981『雲夢睡虎地秦墓』文物出版社
鄭　乃　武　1961「甘粛臨夏大河荘漢墓的発掘」（『考古』1961 年 3 期）
佟　柱　臣　1991『中国辺疆民族物質文化史』巴蜀書社
鳥越憲三郎　1980『箸と俎』（日本人の生活文化史 2）毎日新聞社
内蒙古自治区博物館文物工作隊編　1978『和林格爾漢墓壁画』文物出版社
麦　英　豪　1961「広州東郊沙河漢墓発掘簡報」（『文物』1961 年 2 期）
馮　　沂　1979「山東臨沂金雀山九座漢代墓葬」（『文物』1979 年 1 期）
鳳凰山一六七号漢墓発掘整理小組　1976「江陵鳳凰山一六七号漢墓発掘簡報」（『文物』1976 年 10 期）
彭　錦　華　1999「関沮秦漢墓清理簡報」（『文物』1999 年 6 期）
向井由紀子・橋本慶子　2001『箸』（ものと人間の文化史 102）法政大学出版局
熊瑛・孫太初　1964「雲南祥雲大波那木槨銅棺墓清理報告」（『文物』1964 年 12 期）
余　扶　危　1975「洛陽澗西七里河東漢墓発掘簡報」（『考古』1975 年 2 期）
楊　　豪　1961「広東韶関市郊古墓発掘報告」（『考古』1961 年 8 期）
劉　　雲　1996「中国箸文化史」（『中国箸文化大観』）科学出版社

劉　化　勲　1978「湖南湘郷漢墓」(『文物資料叢刊』2)
梁　思　永　1959「殷墟発掘展覧」(『梁思永考古論文集』考古学専刊甲種 5 号)
盧　兆蔭編　1980『満城漢墓発掘報告』(中国田野考古学報告集考古学専刊乙種 20 号)
文物出版社
盧　茂　村　1980「安徽貴池発現東周青銅器」(『文物』1980 年 8 期)
楼　宇棟編　1989『曽侯乙墓』(中国田野考古報告書考古学専刊丁種 37 号)
楼　宇棟編　1993『密県打虎亭漢墓』文物出版社
渡部　　武　1991『画像が語る中国の古代』(イメージ・リーディング叢書) 平凡社